

【研究ノート】

福田徳三のリカード研究

福田進治

はじめに

明治維新以降、日本にも欧米の技術や知識が急速に導入されていった。経済学もこの時期以降に日本に導入された欧米の知識の体系の一つである。明治期の日本人は日本の近代化のために経済学の知識を旺盛に学んでいった。しかしながら、リカードの経済学については、その本格的な導入は大正後期を待たなければならなかった。アダム・スミス、マルサス、J.S.ミルの経済学が明治初期には導入され始めていたことと比較して、またマルクスやジェボンズの経済学が明治中期以降、順次導入されていったことと比較しても、リカードの導入はかなり遅かった。こうした状況を生み出した原因について、真実一男はリカードの経済学が「我が国の時論とかけ離れていたことにその根拠を求めうるかもしれない」と述べている。そして、リカードの本格的な導入は「大正デモクラシーにおけるマルクス経済学と講談社会主義経済学との対立の時期に、マルクスによる古典経済学研究の批判的研究という面によって拾い上げられた」という。従って、日本へのリカードの導入は「時論とは一応無縁な純粹の理論体系としての導入であると共に、マルクス価値論の優れた根源としての間接的導入でもあったという特色をもつといえよう」(真実 1962, pp.68-72)¹⁾。

とはいえ、明治期の日本ではリカードがまったく検討されなかったというわけではない。とりわけ、明治末期から大正初期にかけてを、真実は大正後期のリカードの本格的導入の路線を準備した時期であるとして「準本格的導入期」と呼んでいる。この時期の日本へのリカード導入の立役者が、福田徳三(1874-1930)と河上肇(1879-1946)である(真実 1962, p.152)。このうち、本稿では福田のリカード研究を扱う。福田はマルクス経済学から新古典派経済学まで、幅広く欧米の経済学を研究し、日本に導入したことが知られている。福田にとって、リカード研究は彼自身の経済学研究のごく一部に過ぎなかったというべきであろう。それでも、日本のリカード研究の歴史について検討する際、その出発点を画定した貢献として無視することはできない。後に述べるように、日本のリカード研究は欧米のリカード研究には見られない特色をもっている。日本のリカード研究の特色の由来を探るためにも、福田のリカード研究がその後の日本のリカード研究に対してどのような貢献を残したのか、日本のリカード研究にどのような影響を与えたのか、こうした点を検討することが不可欠であると考えられる。

こうして、本稿の目的は、福田徳三のリカード研究について検討し、福田の日本のリカード研究

に対する貢献を明らかにすることである。とはいえ、福田のリカード研究については、真実(1962)を始め、千賀(2008)、竹永(2014)、出雲(2015)といった優れた先行研究があり、これらによって福田のリカード研究の背景、特色、意義などが、かなりの程度明らかにされている²⁾。そこに本稿が新たな貢献を付け加えることができかどうかは不明であるが、まずは福田が残したテキストを読み直しながら、福田のリカード研究の特色と意義について再検討し、日本のリカード研究に対する貢献について可能な範囲で考えてみたい。

1 福田徳三のリカード研究の概要

福田徳三は1874年に東京府に生まれ、1896年に高等商業学校(東京高等商業学校)研究科を卒業、ドイツとフランスに留学し、神戸高等商業学校、東京高等商業学校、慶應義塾大学で教鞭を執りながら、マルクス経済学から新古典派経済学まで、幅広く欧米の経済学を研究し、日本に導入しただけでなく、労働問題や社会政策など、当時の日本経済の諸問題について研究し、言論活動を通して社会に影響を与えた。福田の研究は多岐に渡るが、マーシャルやピグーを研究しながら、大正デモクラシーの論客として日本に厚生経済学を導入し、福祉国家論の基礎を築いたという点がとくに評価されている(大森編 2006, p.85)。このように福田はむしろ近代経済学の研究を重視していたように思われるが、比較的初期にリカードに関する以下の3本の論文を執筆した。

- 1) 「リカルドの地代論からマルクスへ」(1908年)
- 2) 「価値の原因と尺度に関するマルサスとリカルドとの論争」(1912年)
- 3) 「リカルド経済原論の中心問題」(1913年)

これらのうち、1)の初出は、1908年に行われた講演「地代新論」の要領で、1915年に刊行された『改定経済学研究』後編(坤)に第六編「マルサス及リカルド研究」の附録として上記のタイトルで収録され、1925年に刊行された『経済学全集第三集-経済史経済学史研究-』に第九編「マルサス及リカルド研究」の附録として再度収録された。ここでは、リカードの地代論と近年の地代をめぐる議論が紹介され、リカードの地代論の本質的主張が階級関係の解明にあり、その論理がマルクスの経済学を構成する基礎になったとされた(『全集』Ⅲ, pp.1259-64)。

2)の初出は、1912年に発表された論文「余剰価値論梗概(1)」で、『改定経済学研究』後編に第六編第二章(第一節・第二節)として上記のタイトルで収録され、『経済学全集第三集』に第九編第二章の第一節・第二節として再度収録された。それらの際、初出論文の第一章「Labour expendedかLabour commandedか」と第二章「費用学と利用学」がそのまま第一節・第二節となった。第一節では、価値論をめぐるマルサスとリカードの論争が検討され、両者の立場がJ.S.ミルにおいて統合され、「費用学」が形成されたとされ、第二節では、リカード=ミルを中心とする「費用学」とジェボンズやメンガーが提示した「利用学」が比較検討されたが、それでも「費用学」を捨て去るべきでないとされた(『全集』Ⅲ, pp.1226-49)。

3)の初出は、1913年に刊行された『続経済学講義－第一編流通総論－』の第一章緒論の一部分で、『改定経済学研究』後編に第六編第三章として上記のタイトルで収録され、『経済学全集第三集』に第九編第二章の第三節として再度収録された。ここではリカードの価値論を踏まえて、リカードの経済学の課題と構成について検討され、その中心的な課題は「価値の根本原則の分配行程上の運用の研究」であるとされた(『全集』Ⅲ, pp.1249-59)³⁾。

このように、福田は一連の文章を通して、リカードの経済学を検討し、その意義と経済学史上の位置づけを画定しようとした。なお、再収録の経緯はやや複雑であるが、各々の内容にはほとんど変化は見られない。そこで、次節では、最終的な形態である『経済学全集第三集』第九編第二章の第一節、第二節、第三節、附録の順にテキストを読み進めていきたい(この結果、最初に発表された地代論の論考を最後に検討することになる)⁴⁾。

2 福田徳三のリカード研究の特色

(1) 「Labour expendedかLabour commandedか」(『全集第三集』第九編第二章第一節)

前節で確認したように、この文章の初出は1912年の論文「余剰価値論梗概(1)」の第一章で、これが『改定経済学研究』後編第六編第二章の第一節として収録され、『経済学全集第三集』第九編第二章の第一節として再度収録されたものである。

最初に、福田はマルサスとリカードが価値論をめぐる論争を繰り返したことに触れ、その問題は未解決のままであり、むしろさらに重要度を増しているとした。そして、福田はマルサスの『経済学原理』(1820)第2章第4節「交換価値の尺度と考えられる商品に費やされた労働について」より、次の文章を引用した(『全集』Ⅲ, p.1227)。

「アダム・スミスは、商品の実質価値と名目価値に関する章において、労働をもって普遍的かつ正確な価値尺度であると考えていたが、そこで、彼自身が尺度として定義している労働を適用する際に同じ方法を厳守しないために、彼の研究に若干の混乱を引き起こしている。」

「しばしば彼は、ある商品の価値はその生産に費やされた労働量によって決定されると論じ、またしばしば、その商品が交換において支配する労働量によって決定されると論じている。」

(Malthus 1820/小林訳 p.123)

ここでマルサスは、スミスが価値の尺度を論じる際に「費やされた労働」(Labour expended)と「支配する労働」(Labour commanded)を正しく区別していないことを批判している。マルサスにとって、「支配する労働」こそが正しい価値の尺度であった。続いて、福田はリカードの『経済学原理』(1817)第1章「価値について」より、次の文章を引用した(『全集』Ⅲ, p.1228)。

「アダム・スミスは、このように正確に交換価値の根源を定義し、そしてすべての物はその生産に投下された労働の多少に比例して価値が増減することを首尾一貫して主張するべきであったにも関わらず、自ら別の価値の標準尺度を定めて、この尺度の大小の量と交換されるに比例

して物の価値が増減すると論じている。」(RW, I, pp.13-14)

ここでリカードも、スミスが価値の尺度を正しく定義していないことを批判しているが、リカードにとっては、マルサスとは逆に、「投下された労働」（「費やされた労働」）こそが正しい価値の尺度であった。こうして福田はいわゆるリカードの投下労働価値説とマルサスの支配労働価値説の対立について論点を提起したが、その理論的内容については、とくに深く検討しようとはせず、むしろ論争の経緯について次のように述べた。

「リカードは労働こそを価値とする彼の説を必ずしも終始一貫して主張していない。『経済学原理』初版と第三版とは文面上はそれほど著しい変更はないが、内容については見過ごすことができない相違があることを認めざるを得ない。それだけでなく、彼がマルサスに宛てた書簡、マカロックに宛てた書簡、ハチス・トラワーに宛てた書簡等を見るなら、彼が絶えずこの問題に心を砕き、考え方も自ずと変化し、J.S.ミルが残した後の生産価値説に近づいていったことが分かる。しかし、Labour expendedを主張し、Labour commandedを退ける議論についてはほとんど何も変化も示さず、ただinvariable measure of valueなるものをどうしても見出すことができないと悲観的に悟っただけだった。」(『全集』Ⅲ, p.1230)

このように、福田はリカードが『経済学原理』の改訂を通して、本来の価値論の立場から「後退」していったことと、同じ時期にリカードが「不変の価値尺度」を探求し続けていたことに言及している。いずれも今日では周知の問題であるが、この時期に福田がこれらの問題に言及していたことは興味深い。しかし、全体的には、福田はその理論的内容について深く検討するというよりも、さまざまな文献資料に目を通しながら、リカードがその死の直前まで熱意をもってマルサスとの議論を続けていたことに注目している。そして、リカードの最晩年、1823年8月31日付のマルサス宛書簡(550)より、次の文章を引用した(『全集』Ⅲ, p.1233)⁵⁾。

「価値の問題については、あと二言三言、述べる必要があるだけです。そうすれば私の仕事は終わります。あなたはフィートは可変的な人間の身長を測ることができるだろうが、人間の身長はフィートを測ることはできないという議論を援用されることはできません、なぜなら、あなたは一定の事情の下では人間の身長が可変的でないことに同意しているからであり、そして私がいつも言及しているのはこういう事情のことだからです。」(RW, IX, p.380)

「マルサス学兄、これで私の仕事は終わりました。他の論争者たちと同じように、多くの討論を重ねた後、私たちはそれぞれ自分の意見を維持しています。しかし、これらの討論は決して私たちの友情に影響するものではありません。私はもしもあなたが私の意見に同意して下さったとしても、あなたに対して今以上に好意をもつことはないでしょう。」(RW, IX, p.382)

ここでリカードはマルサスとの長年の論争を踏まえて、「不変の価値尺度」に関する最終的な見解を述べるとともに、意見の一致をみなかったマルサスに対して謝意を表明している。このわずか十日後にリカードは死去するが、そのことを予期していたかのような内容である。この書簡の内容について、福田は多くを語っていないが、何を思って引用したのだろうか⁶⁾。

さて、福田はマルサスがリカードの死後も価値論についてさらなる探求を進めていったことを論じた。そして、マルサスは『経済学における諸定義』(1827)の執筆を挟みながら、『経済学原理』の改訂作業を進めた。福田はマルサスの死後に刊行された『経済学原理』第2版(1836)第2章第4節の冒頭部分に付された註の一文を引用した(『全集』Ⅲ, p.1234)。

「商品に費やされた労働はその商品の価値の主要な原因であるが、価値の尺度ではない。……商品が支配する労働はその価値の原因ではないが、その尺度である。」(Malthus 1936/吉田訳 p.144)

ここでマルサスは価値の「原因」と「尺度」を区別し、「費やされた労働」は価値の「原因」であり、「支配する労働」は価値の「尺度」であるという見解を表明している。福田によると、スミスもリカードも価値の「原因」と「尺度」を正しく区別していなかった。マルサスも『経済学原理』初版を刊行した頃はこれらを区別していなかったが、第2版に至ってこれらを区別する見解に到達したという。その後、J.S.ミルもこうした区別を継承しながら、彼自身の価値論を構築した。福田はミルの『経済学原理』(1848)第3編第6章「価値論の要約」より、次のように複数の文章を断片的に引用した(『全集』Ⅲ, p.1237)。

「ある物の価値とは、その物が交換される他の物または物一般の数量という意味である。……ある物の一時的な価値または市場価値は需要と供給に依存する。……各々の物は一時的な価値の他に、永続的な価値または自然価値と呼ぶことができるものをもっている。しかし、多くの物は自然的にそれらの生産費の割合において、あるいはその費用価値と呼ぶことができるものをもっており、互いに交換される。」(Mill 1948/末永訳 pp.94-95)

ここでミルは伝統的な「市場価値」と「自然価値」という概念に加えて、「費用価値」という概念を提案している。ミルにおいては、労働と同様に、労働以外の生産要素が考慮されているため、商品の価値はもはや「費やされた価値」によって決定するとは言えず、単純に生産費用に依存して決定することになる。このことについて、福田は次のように述べた。

「ミルにおいては、『費やされた労働』と『支配される労働』の区別はなく、労働の他に資本もまた『費やされるもの』であって、労働を価値とする理論は、拡張されて生産費価値論となり、費用学としての経済学が確固として打ち立てられたのである。そして、これはリカードが晩年に到達した考えに極めて近いものであるということを認めなければならない。」(『全集』Ⅲ, p.1238)

福田によると、結果的にリカードの「費やされた労働」の立場とマルサスの「支配する労働」の立場の対立は解消し、最終的に「費用学」が成立したという。福田のいう「費用学」とは、労働価値説や生産費説を含む、生産条件の働きを重視する立場の経済学のことを指している。ただし、この立場はマルサスとは異なるものであり、「リカードが晩年に到達した思想に極めて近い」という。このことについて福田は次のようにも述べた。

「経済学が費用学として著しく発達し、他の側面をおろそかにしていることは、少しも不思議

なことではない。マルサスの立場からこれを見るなら、リカードの存命中にこの根本的な問題についてさらに討論を続け、両者が一致する点を確定することができなかつたことは、生涯に渡って悔やまれることであつたことに違いない。」(『全集』Ⅲ, pp.1238-39)

このように福田は「マルサスの立場からこれを見れば」と言いながらも、リカード=ミルの立場が主流派となり、マルサスの立場が後世に十分継承されなかつたことを嘆いているようにも見える。ここまでの福田の議論を一瞥すると、リカードの立場とマルサスの立場がミルにおいて統合されたという結論になるのかと思われたが、また、今日、一般的にもそのように説明されることが多いと思われるが、福田の理解はそれらとは異なるようである。

(2)「費用学と利用学」(『全集第三集』第九編第二章第二節)

この文章の初出は1912年の論文「余剰価値論梗概(1)」の第二章で、これが『改定経済学研究』後編に第六編第二章の第二節として収録され、『経済学全集第三集』に第九編第二章の第二節として再度収録されたものである。

前述のように、福田はリカードとマルサスの価値論をめぐる論争を経て、J.S.ミルにおいて「費用学」が成立したと主張した。このことを踏まえて、ここでは、福田はこの「費用学」とその対抗者として登場した「利用学」について比較検討した。まず、「費用学」について、あらためて次のように述べた。

「費用学とは、費用価値をもって経済学の中心概念とするものである。……費用学はLabour expended説にその起源があるから、リカードは費用学としての経済学の父であるといつても間違いではない。」(『全集』Ⅲ, pp.1240-41)

すでに述べたように、「費用学」とは、労働価値説や生産費説を含む、生産条件の働きを重視する立場の経済学のことである。この立場は、リカードに端を発し、ミルにおいて確立したというのである。続いて、「利用学」について次のように述べた。

「この費用学と正反対であるのが、利用学である。ジェボンズとメンガーが同じ年に利用学としての経済学を唱え始めた。利用を価値の唯一の原因であると思ひ、また決定者としたのである。」(『全集』Ⅲ, pp.1241-42)

ここで福田が「利用」と呼んでいるのは、今日、一般的に「効用」と呼ばれるものである⁷⁾。従つて「利用学」とは限界学派の立場、すなわち限界効用理論を基礎とする、需要条件の働きを重視する立場の経済学を指している。これについて説明するとともに、福田はジェボンズの『経済学の理論』第2版(1879)より次の文章を引用した(『全集』Ⅲ, pp.1241)。

「究極において、真の経済学体系が樹立した暁には、あの有能であるが、思想の間違ったデヴィッド・リカードが経済学の車輪を誤つた軌道に逸らしたことが判明するだろう。しかも、この軌道は、同じく有能であるが、思想の間違った彼の賛美者ジョン・スチュアート・ミルが右の車輪を混乱に向かつてさらに推し進めていったところのものである。マルサス、シーニョア

のような真の学説をはるかによく理解した経済学者もいるが、彼らはリカード＝ミル学派の団結と勢力によって圏外に追放されてしまった。」(Jevons 1979／邦訳 p.xliv)

ここでジェボンズは、リカード＝ミルが主流派を形成し、経済学の方角を誤らせた一方で、マルサスやシーニョアの「真の学説」は追放されてしまったと嘆いている。ジェボンズはマルサスたちの立場が彼自身の立場につながると考えているのである。ここに至って、福田がマルサスの立場が潜在的に「利用学」につながると考えていることが明らかになる。しかし、福田はマルサスがどのように「利用学」につながることについては明示的に説明していない⁸⁾。

ともあれ、福田はこのように「費用学」と「利用学」を対立する立場として経済学の歴史を整理しようとした。そして、両者の立場について鋭意検討しているが、その部分は今日的にはあまり重要でないように思われるので、本稿では省略する。その後、両者の立場はマーシャル他の学者たちにおいて統合されたという。このことについて、福田は次のように述べた。

「マーシャル、ディーツェル、最近ではレキシスは、右のように謎だらけではなく、やや内容的に費用と利用とを結びつけようと試みて、著しく成功しているようである。」

「しかしながら、折衷は所詮、折衷であり、混合は所詮、混合であることを免れない。マーシャルを面白い比喩を作って、費用か利用かという問題は、ハサミの両刃のような物だ、刃が二つなければ物は切れない、とはいえ、一方の刃は動かず、他方の刃のみが動くこともあり、両刃とも動くことがあると言っている。」

「……いわゆる両成敗であって、公平であることには違いないが、学問の根本問題がこのような他愛もないことで確定されるとするならば、学問が役に立つことは極めて少ないと感じざるを得ない。」(『全集』Ⅲ, pp.1246-47)

ここで福田は、マーシャル他が「費用学」と「利用学」を統合して「成功しているようだ」と述べておきながら、その直後に彼らの試みに否定的な評価を下している。有名な「ハサミの刃」の比喩にも言及しているが、それは単なる「両成敗」であって、学問的な解決ではないと断罪している。その上で、福田は次のように述べた。

「費用学に飽きて利用学に馳せ参じたことは間違いであったように思われる。費用学はともすれば浅はかであるかもしれないが、それでも自分の畑に自分が植えた苗であり、一通りの道筋は立っている。途方もない望みを抱いて、みすぼらしい花に心を傾けるよりも、貧弱であっても醜くても、自分で植えて育てた花を愛でるのが最も良い。」(『全集』Ⅲ, p.1248)

こうして福田は最終的にリカード＝ミルの立場につながる「費用学」を支持することを表明した。「費用学」にも問題はあがるが、簡単に「利用学」に乗り換えるべきではなく、その問題の解決に努めるべきという趣旨であろう。ここまで、福田はリカードの立場よりもマルサスの立場を支持しているようにも思われたが、そうではなかった。また、当然、マーシャルの立場を支持するものと予想されたが、良くも悪くも予想は裏切られた。少なくともこれらの論考を執筆した時点では、福田はマーシャルの立場よりもリカードの立場を評価していたということが分かる。

(3) 「リカード経済原論の中心問題」(『全集第三集』第九編第二章第三節)

この文章の初出は 1913 年刊行の『続経済学講義 - 第一編流通総論 -』の第一章緒論の一部分で、これが『改定経済学研究』後編に第六編第三章として収録され、『経済学全集第三集』に第九編第二章の第三節として再度収録されたものである。

ここでは、福田は「費用学」か「利用学」かという議論から一旦離れて(もともと別の論考であったから、直接的に関連しなくても不思議ではない)、リカードの経済学の課題と構成について検討した。その冒頭で、福田はリカードの課題について次のように述べた。

「リカードが『経済学原理』において中心的な問題としたのは、分配の問題であって、彼はこれを彼が主張する価値の根本原則の適用として考察した。そして、彼の学説の中で最も多く後世に影響を与えたものは、じつにこの分配の行程における価値の適用論であった。」(『全集』Ⅲ, pp.1249-50)

リカードが分配の問題を経済学の課題としたことも、その理論的基礎が労働価値説であったことも今日ではよく知られているが、これらを踏まえて、福田はリカードの中心的な議論を「分配の行程における価値の適用論」と呼んでいる。このことを説明するために、福田はリカードの『経済学原理』第 2 版(1819)以降追加された第 1 章第 1 節のタイトルを提示した(『全集』Ⅲ, p.1250)。

「商品の価値、すなわちこの商品と交換される他の商品の量は、その商品の生産に必要な労働の相対量に依存するのであって、その労働に対して支払われる報酬の多少には依存しない。」(RW, I, p.11)

ここでリカードは、商品の価値は「その生産に必要な労働の相対量」に依存するのであって、「その労働に支払われる報酬の多少」に依存するのではないと主張している。周知のように、前半はリカード自身の投下労働価値説の主張であり、後半はスミスの構成価値説の批判を意味する。このタイトルの一文について、福田は次のように述べた。

「彼 [リカード] の理論の全体より見るなら、この否定的主張こそが、むしろはるかに重要である。リカードの真意は、単純に価値に定義を下し、それが労働の量によって決定するというものではなく、価値の決定は賃金の多少によるのではなく、実際に費やされる労働の量の多少によるというところにある。言い換えるなら、価値が決定するのは、分配の行程に関係なく、生産の行程においてのみであるというところにある。」(『全集』Ⅲ, p.1251)

このように福田はリカードの経済学において、商品の価値は「生産の行程」において決定するのであって、「分配の行程」に依存するのではないと主張している。しかし、後世の経済学者たちはこの文章の前半のみに注目し、後半の重要性を見落としたために、リカードの立場は誤解されてきたという(『全集』Ⅲ, p.1252)。とはいえ、前半部分、すなわち、商品の価値が「その生産に必要な労働の相対量」に依存して決定するという部分についても、リカードにとって重要であり、それがまさに「価値の根本原則」であったはずである。どうして後半部分が「はるかに重要である」というのだろうか。このことについて、福田は次のように述べた。

「リカードにとって、生産の問題は極めて単純であって、ほとんど経済理論を構成せず、価値は生産において費やされた労働の量によって決定されるという根本原則を説明すること以上には何も役割をもたなかった。……経済理論の出発点はこの根本原則そのものではなく、むしろそれが実際においてどのように運用されるかにあり、すなわち経済生活においてこの根本原則が原則どおりに作用せず、さまざまな変容を呼び起こすこと、このことが経済理論の研究の対象であるべきものである……。」(『全集』Ⅲ, p.1254)

すなわち、福田は「価値の根本原則」それ自体よりも、それが現実の経済においてどのように作用するのか、どのように変容するのかが、リカードの経済学を中心問題であるというのである。その上で、福田は「価値の根本原則」の作用が変容する主要な原因について、次のように述べた。

「生産に費やされた労働の量が価値を決定するという原則が実際の生活においてさまざまな変容を呼び起こす根本的な原因は、その労働なるものが実際にはその財に直接に加えられた労働だけでなく、過去において費やされた労働をも含むことにある。」(『全集』Ⅲ, p.1255)

「リカードはこの両者〔資本の蓄積と土地の私有〕が存在する社会、すなわち資本の利潤と土地の地代が支払われる今日においても、なおこの原則が作用すると主張したが、ただ、このために影響を被る程度において差異があるため、このことを研究することこそが経済学の主題であるとしたのである。」(『全集』Ⅲ, p.1256)

これらの文章うち、前者は「過去に費やされた労働」に関わる問題、または生産過程の時間的構造の問題に言及している。いわゆる労働価値説の「修正」の問題である。リカードは『経済学原理』第1章の後半で、この問題について検討した。後者は「資本の利潤」と「土地の地代」に関わる問題に言及している。リカードは『経済学原理』第2章から第6章にかけて、この問題について検討した⁹⁾。これらの問題は戦後の日本のリカード研究史の中でリカードの『経済学原理』の理論構造の問題として検討されることになるが、福田は早くも戦後の研究者たちと同様の理解に達していたということが出来る¹⁰⁾。その上で、福田は次のように述べた。

「リカードはこのように分配の問題のみを主題とした。……実質的にリカードが一度確定したものが最も強く経済理論を左右しつつある。……経済学の本質は非常に適切にリカードによって見出されたのであり、後の精密な研究をもってしてもこれに多くの変更を加えることができないからであるに違いない。」(『全集』Ⅲ, p.1258)

このように、福田はリカードの『経済学原理』の課題が分配の問題であること、それが『経済学原理』の理論構造を規定していることを主張しただけでなく、リカードの課題設定が今日の経済理論のあり方を規定していることを主張している。この点で、福田のリカードの評価は非常に高いものであった。もっとも、彼の時代はすでに20世紀初頭であって、欧米では新古典派経済学がかなり勢力を拡大しており、より高度な経済理論が生まれようとしていた。そのような時代背景を考えると、福田のリカードの評価は過大評価であったという言うべきかもしれない。

(4) 「リカードの地代論よりマルクスへ」(『全集第三集』第九編附録)

この文章の初出は1908年に行われた講演「地代新論」の要領で、これが『改定経済学研究』後編に第六編の附録として収録され、『経済学全集第三集』に第九編の附録として再度収録されたものである。

この文章では、福田は一転してリカードとマルクスの関係を検討した(この文章はすでに検討した文章に数年先行して執筆されたものであるから、課題に乖離があるのも頷ける)。まず、福田はリカードの地代論が今日では大半の経済学者に受け入れられているとした上で、「地代」という語の用語法について次のように述べた。

「その[リカードの]地代論において、地代という語の用語法が世間で普通にいう地代とは異なっている。これが経済学で地代という語を普通の意味と異なって用いるようになった理由であって、また、分配論において地代を賃金・利子・企業の利潤と異なる特別な取り扱いをする理由である。」(『全集』Ⅲ, p.1260)

周知のとおり、リカードの地代論によると、地代は生産費を超過する剰余として発生するため、生産費の構成要素とはならない。このため、地代は他の分配変数と異なる扱いを受ける。これらのことを踏まえて、福田は経済学における「地代」が通常の意味と異なると述べている。

その上で、福田は近年の「二つの大きな異なった傾向」を紹介する。第1の傾向は「この地代を特別に取り扱うように、これをさらに押し広げて、他のすべてのもの、すなわち賃金・利子・企業の利潤にまで広げて、これらを地代を取り扱うように取り扱うという傾向」であり、アメリカのJ.B.クラークが唱えて、多くの学者が賛同するようになったという。第2の傾向は「地代を特別に取り扱うことを止めて、これを普通の語と同様に取り扱おうとする傾向」であり、オーストリアのベーム＝バヴェルクが有力な論者であるという。しかし、これらの傾向については、福田はとくに詳しく検討しようとしなかった。むしろ、イギリスやフランスの多くの学者たちは従来の学説に従っており、そこで「これら従来の学説に従う学者と、これらの経済学者の急所を突く一派の学者との衝突が起こる」(『全集』Ⅲ, p.1261)とした。この「一派の学者」とは社会主義の学者であり、その代表的な論者が、ドイツのマルクスであるという。

さて、福田はリカードとマルクスが敵対するとしながら、両者を引き付けて比較する。そして、リカードがマルクスと同じくユダヤ人であったことと、リカードが証券取引所の仲買人であったことに言及した上で、彼の地代論について次のように述べた。

「この時代に、人種的天性と職業上の経験とを有するリカードが穀物の輸入禁止を見て憤慨したのはむしろ当然であろう。そしてこの考えは彼の学説の中に、地代論において最も顕著に現れている。彼の地代論は、要するに地主を敵視する説であって、地代は生産費の一部ではないということがその最終的な結論である。」(『全集』Ⅲ, p.1263)

このように、福田はリカードの地代論の本質的な性格を「地主を敵視する説」であるとした。このことを踏まえて、福田はリカードとマルクスの関係について次のように述べた。

「地主が富めば富むほど、他の階級の者には富が入らない。従って、地主は社会進歩の敵であるということになる。これをマルクスが引き継いで彼自身の問題の領域まで引き伸ばした。リカードの説を引き伸ばせば、地代論の点においては、社会主義の結論に到達するに違いない。」
（『全集』Ⅲ, p.1264）

すなわち、リカードの地代論の論理をマルクスが引き継いで社会主義の立場を形成したというのである。ここでも福田のリカードの評価は低くないし、マルスクの評価も低くなさそうである。しかし、福田のリカードとマルクスの関係に関する解釈は妥当であろうか。リカードの地代論に階級関係を暴露するという側面があることは確かであるが、マルクスの課題意識とは必ずしも合致しないだろう。言うまでもなく、リカードは地主と資本家の階級対立を見ていたが、マルクスは資本家と労働者の階級対立を見ていた。また、リカードとマルクスの関係を論じる場合、両者の価値論の関係を検討しなければならないように思われるが、この文章では、福田は価値論をめぐる問題にはまったく言及していない。こうした点で、福田の議論は興味深いが、未熟であったと言わざると得ない。恐らくは、この後、福田はリカードの価値論について検討を進め、先に見たような優れた文章を執筆するに至ったのではないかと思われる。

3 福田徳三のリカード研究の意義

以上のように、福田は一連の文章を通して、リカードの経済学を検討し、その意義と経済学史上の位置づけを画定しようとした。その基本的主張は、第1に、リカードの労働価値説が基礎となって生産条件の問題を重視する「費用学」が形成された（『経済学全集第三集』第九編第二章第一節・第二節）、第2に、リカードによって「価値の根本原則の分配行程上の適用の研究」という経済学の中心的な課題が設定された（第九編第二章第三節）、第3に、リカードの地代論の論理をマルクスが引き継いで社会主義の立場を形成した（第九編附録）というものである。

こうした主張を正当化するために、福田は当時利用可能であった原語の一次文献を渉猟し、リカードの実像に迫ろうとした。現在よりもはるかに文献資料の制約が強かったであろう時代に、リカードやマルサスの主著だけでなく、書簡集やその他の文献にも目配せしていることは高く評価できるし、こうした研究方法が後の世代に受け継がれていったとすれば、それだけでも福田の貢献は大きかったというべきであろう。また、こうした研究の成果として、リカードとマルサスの価値論をめぐる論争の性格や、リカードとJ.S.ミルの継承関係と「費用学」の形成、それらと限界学派の「利用学」や新古典派との関係など、リカードの経済学史上の位置づけを適切に捉えていた。こうした点で、福田は日本のリカード研究の基礎または出発点を画定したといえる。そして、福田のリカード研究を土台として、その後の日本のリカード研究が可能になったといえるだろう。

しかしながら、止むを得ないとはいえ、不十分な点も少なからず目についた。何よりも、福田のリカード研究はリカード研究の紹介というべきものであり、本格的なリカード研究とは言い難いも

のだった。リカードとマルサスの論争の検討についても、「費用学」と「利用学」の比較検討についても、理論的に十分に掘り下げられたものではなかった。とくにマルサスの位置づけが曖昧であるように思われた。リカードの価値論とマルサスの価値論をミルが統合したかのように述べられている一方で、リカード＝ミルが「費用学」の形成につながり、マルサスは潜在的に「利用学」の形成につながるとされていた。それ以上に、リカードとマルサスの関係の検討が未熟であるように思われた。リカードとマルサスのそれぞれの価値論について検討することなしに、両者の関係を論じることにはかなり無理があるように思われた。

特徴的な点としては、何よりも、福田がマーシャルの立場よりもリカード＝ミルの立場を評価していたことが挙げられる。日本に厚生経済学を導入した福田が、限界学派や新古典派の立場よりもリカード＝ミルの立場を評価していたことは意外な事実である。この点と関わって、千賀重義は福田自身の立場を「厚生経済学」とした上で、リカードやマルサスの立場を福田に克服されるべき「価格経済学」であったと述べている（千賀 2008, p.54）。福田の経済学研究の歩みの全体を考えるなら、千賀の指摘が正しいと思われる。他方、福田の歩みの比較的初期に取り組まれたリカード研究に注目するなら、福田は確かに限界学派や新古典派よりもリカードを評価していたというべきであろう。その後、さらなる経済学研究を進める中で、福田はリカードの立場を克服しなければならないと考えるようになったものと考えられる¹¹⁾。

最後に、福田のリカードの地代論とマルサスの社会主義の関係に関する検討はどのように受け止めるべきだろうか。千賀は福田のリカード研究はマルサス批判のためのリカード論であったと述べているが（千賀 2008, p.34）、本稿で検討した文章を見る限り、福田はとくにマルサスを批判していないように思われる。もっとも、本稿では初期の一編の文章を見ただけであるし、福田はこの文章を執筆した後もマルサス研究に精力的に取り組んでいる。ただ、福田はその後の研究においても、リカードとマルサスの関係にはあまり言及していないように思われる。とはいえ、これ以上、こうした問題を検討することは本稿の課題を超えるし、筆者の力量も追いつかないので、本稿の考察はここで終えることとしたい。

おわりに

本稿では、福田徳三のリカード研究を内容とする3本の論文を検討し、その特色と意義を明らかにしようと努めた。その結果、福田がこれらの論考においてリカードの経済学を検討し、その意義と経済学史上の位置づけを画定することにある程度成功していたことが分かった。とくに、日本へのリカードの導入から間もない、文献資料の制約が強かった時代に、原語の一次文献を渉猟し、リカードの実像に迫ろうとする研究を遂行したことと、その成果として、リカードとマルサスの対立関係、リカードとミルの継承関係、限界学派や新古典派との関係を明らかにしたことは、顕著な貢献であったと思われる。不十分な点も少なからず目についたが、それらもこの時代としては致し方

のないことである。こうした福田のリカード研究は、その後の日本のリカード研究の基礎または出発点を画定することになったといえるだろう。

これまで筆者はスラッファ編『リカード全集』（1951-73）刊行後の日本のリカード研究の検討に取り組んできた。その結果、欧米のリカード研究がスラッファのリカード解釈の強い影響の下で発展してきたこと、その中でしばしば激しい論争を生じてきたことと比較して、日本のリカード研究がスラッファのリカード解釈から刺激を受けながらも、その影響を批判的に克服し、リカードの労働価値論の研究に基づく独自の研究成果を生み出してきたことが明らかになった。とくに日本のリカード研究がリカードの経済学の現代的意義よりもリカードの歴史上の本来の姿を明らかにすることを重視してきたことと、その際、リカードの労働価値論とマルクスの剰余価値論の関係が多かれ少なかれ意識されていたことは、欧米のリカード研究には見られない日本のリカード研究の顕著な特色であるといえる¹²⁾。

本稿では、こうした『リカード全集』刊行後の日本のリカード研究の特色を生み出した要因を探るために、戦前日本のリカード研究の検討を試みたが、本稿で検討した福田のリカード研究は、上記のような日本のリカード研究の特色を予感させるものといえるだろうか。そこまではいえないように思われる。こうした問題を解明するためにも、さらなる検討が必要である。

[謝辞] 本稿は、JSPS科学研究費補助金 基盤研究 (A) 「リカードウ・マルサス論争と古典派経済学の展開：その交錯と対抗および現代性の研究」(課題番号17H00982)、基盤研究 (C) 「戦間期以降の日本のリカード研究史の全体像を再構成する研究」(課題番号20K01572) の助成を受けた研究成果である。

注

- 1) 明治維新以降の日本へのリカードの導入の過程については、真実 1962、真実 1965が非常に詳細に跡づけており、この問題に関する基本文献である。また、近年では、出雲 2015、竹永 2017もその経緯と特徴を的確に論じており、有益な文献である。
- 2) 福田徳三の経済学全体に関する先行研究はあまりにも多く、筆者の力量ではフォローできない。福田のリカード研究については、真実 1962がその中で簡潔にまとめている。千賀 2008は福田の経済学研究全体の中でリカード研究の位置づけを明らかにしている。出雲 2015もその中で福田のリカード研究の特徴を簡潔にまとめている。竹永 2017は福田のリカード研究を含むこの時期の主要なリカード研究文献の現代語訳を掲載するとともに、各々について詳細な解説を加えている。
- 3) これらの結果、『経済学全集第三集』第九編第二章の構成と附録は次のようになった。
 - 第二章 価値の原因と尺度に関するマルサスとリカルドとの論争
 - 第一節 Labour expendedかLabour commandedか
 - 第二節 費用学と利用学
 - 第三節 リカルド経済原論の中心問題
 - 附 録 リカルドの地代論からマルクスへ
- 4) 以下、福田のテキストからの引用の際は、竹永 2017を参考にしながら、現代語に訳して示した。また、他

の経済学者のテキストからの引用の際は、各々の邦訳書から引用した。ただし、正確さ、読みやすさを考慮して適宜訳文を修正している。

- 5) この他、福田は1823年8月15日付のマルサス宛書簡(542)から次の文章を引用している。「私たちの間の相違はこれです。あなたはある商品は多量の労働を支配するだろうから高価であると言ひ、私はある商品はその生産に多量の労働が投下されたときのみ高価であると言ひます。インドではある商品が20日の労働によって生産され、30日の労働を支配することができて、イギリスではそれが25日の労働によって生産され、わずか29日の労働を支配するに過ぎないとします。あなたの説によると、この商品はインドでより高価であることとなりますが、私の説によると、イギリスでより高価であることとなります。」(RW, IX, p.348)
- 6) リカードは生産過程の時間的構造の相違により労働量と価値の比例関係が「修正」を被るという問題に悩みながら、晩年に至るまで、そのような状況の下でも商品の価値を正しく測定できる「不変の価値尺度」を探求し続けた。論点は多岐にわたるが、差し当たり、福田 2014、福田 2019を参照せよ。
- 7) 福田は「わが国では『効用』が用いられ、河上教授もこれを用いているが、『利用』の方が元の意味により近いように思われる」と述べている(『全集』Ⅲ, p.1242)。
- 8) この文章の初出論文には「緒言」が付されており、その中で、スミスの「労働」概念がリカードの「Labour expended」とマルサスの「Labour commanded」に分かれ、前者の系譜はマカロック、J.S.ミル、マルクス他を経て「費用学」に至り、後者の系譜は途切れながらも、ジェボンズ、メンガーを経て「利用学」に至り、両者が統合され、「余剰価値新説」と、マーシャル他につながる「混合学派」という2つの学派が生まれることを示す図が掲載されている(福田徳三 1912, p.2)。
- 9) ここで福田はリカード『経済学原理』序文から、次の文章を引用している。「大地の生産物、すなわち、労働、機械、および資本の結合作用によって地表から得られるすべての物は、社会の三階級、すなわち、土地の所有者、その耕作に必要な資財つまり資本の所有者、その勤労によって土地が耕作される労働者の間に分割される。／しかし、社会の異なった段階においては、地代、利潤、賃金という名称の下にこれらの階級の各々に割り当てられるべき大地の生産物の割合は、本質的に異なるであろう。それらは主として、土壤の現実の肥沃度、資本の蓄積と人口、また農業において使用される熟練、工夫力、危惧に依存する。／この分配を左右する法則を決定することが、経済学における主要問題である。」(RW, I, p.5)
- 10) リカード『経済学原理』の理論構造については、戦後日本では、羽鳥卓也や中村廣治が精力的に議論してきた。これらの議論については、差し当たり、福田 2019を参照せよ。
- 11) 千賀 2008は、福田は社会問題の解決のためには社会主義ではなく、社会政策を推進するべきであると考えようになり、このためにリカードやマルクスの「価格の経済学」を克服し、生存権に関わる厚生闘争を展開しなければならぬと考えていたという。この意味で、福田にとって、リカードやマルクスの経済学は克服すべき対象であったということになる(pp.48-54)。
- 12) スラッファ編『リカード全集』刊行後の欧米のリカード研究は、スラッファのリカード解釈を継承するスラッファ派とそれを批判する新古典派との論争によって特徴づけることができるが、同じ時期の日本のリカード研究はリカードの労働価値論の研究に基づき、リカードの経済学を労働価値論を基礎とする資本蓄積論の体系として把握する解釈が主流となった。筆者の日本のリカード研究に関する見解は、福田 2008、福田 2014、福田 2019を参照せよ。

参考文献

福田徳三 1908「地代新論」(講演要領、中央大学)／福田徳三 1915「リカードの地代論よりマルクスへ」『改定経済学研究』後編(坤)、第六編附録、同文館、pp.1276-81／福田徳三1925『経済学全集第三集-経済史経済

- 学史研究-』第九編附録、同文館、pp.1259-64.
- 福田徳三 1912「余剰価値論梗概（其一）」『国民経済雑誌』13(1), pp.1-26./福田徳三 1915「価値の原因と尺度に関するマルサスとリカードとの論争」『改定経済学研究』後編（坤）、第六編第二章、同文館、pp.1245-67 /福田徳三1925『経済学全集第三集-経済史経済学史研究-』第九編第二章第一節・第二節、同文館、pp.1226-49.
- 福田徳三 1913「第一章緒論」（の一部）『続経済学講義-第一編流通総論-』大倉書店、pp.9-21/福田徳三 1915「リカード経済原論の中心問題」『改定経済学研究』後編（坤）、第六編第三章、同文館、pp.1267-76/福田徳三1925『経済学全集第三集-経済史経済学史研究-』第九編第二章第三節、同文館、pp.1249-59.
- Jevons,W.S. 1911, *The Theory of Political Economy with Notes and an Extension of the Bibliography of Mathematical Economic Writings by H. S. Jevons*, London: Macmillan. 小泉信三・寺尾琢磨・永田 清（訳）1981『経済学の理論』日本経済評論社
- Malthus,T.R. 1920, *Principles of Political Economy considered with a View to thier Practical Application*, London: John Marray. 小林時三郎（訳）1968『経済学原理』全2巻、岩波書店
- Malthus,T.R. 1936, *Principles of Political Economy with conciderable Additions from the Auther's own Manuscript and an original Memoir*, London: William Pickering. 吉田秀夫（訳）1937『経済学原理』全2巻、岩波書店
- Mill,J.S. 1948, *Principles of Political Economy with some thier Applications to Social Philosophy*, London: John W. Parker. 末永茂喜（訳）1959-63『経済学原理』全5巻、岩波書店
- Ricardo,D., Sraffa,P.(ed.) 1951-73, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols, Cambridge: Cambridge University Press. 堀 経夫他（訳）1969-99『デイヴィド・リカード全集』全11巻、雄松堂書店
- 福田進治 2008「日本の初期リカード研究」『人文社会論叢 社会科学篇』20, pp.41-62.
- 福田進治 2014「日本のリカード研究-労働価値理論を中心に-」『マルサス学会年報』23, pp.1-33.
- 福田進治 2019「日本のリカード研究の独自性と多様性」『人文社会科学論叢』7, pp.139-52.
- 出雲雅志 2015「戦前日本のリカードウ研究-1869-1929年試論-」（『経済研究所年報』28, pp.133-62.
- 真実一男 1962「明治期及び大正前期におけるリカードウ導入史」『経済学年報』16, pp.63-168.
- 真実一男 1965「大正後期より戦前までのリカードウ導入史」『経済学年報』22, pp.1-61.
- 真実一男 1975「日本におけるリカード導入史」『リカード経済学入門』pp.152-94.
- 大森郁夫（編）2006『日本の経済思想1』（経済思想⑨）日本経済評論社
- 千賀重義 2008「福田徳三のリカードウ論」『横浜市大論叢』59(1-3), pp.33-56.
- 竹永 進 2014「大戦間期における日本のリカードウ研究」『経済論集』102, pp.39-106.
- 竹永 進（編）2017『大戦間期日本のリカード研究』法政大学出版局